
遅れてきた王子

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅れてきた王子

【Zコード】

Z0430Z

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

高名な魔女の怪しい予言を振り回す迷惑で残念な王子と、それに付き合わされる有名な五人姉妹の見合い話。癖のある彼女たちとどこまでも残念な王子の見合いは成就するのか？

序（前書き）

Asymmetryというサイトからの移植改訂版となります

四つの大陸が海に浮かぶ世界にて、そのどれにも属さず、またほぼ中央に位置する島国は、長い間平和を謳歌した国家がその島を治めていた。

象徴的立場におされた王は、尊敬される存在ではあるものの、彼ら彼女らを「冗談とともに口の端にのせたとしても、笑いこそそれ咎められることはない、といった程度の扱いとなつていて。その代わりに、その國の議会を運営する議院たちは非常に優秀であり、また出自によらず取り立てられる彼らは、国民皆の憧れの存在でもある。長い間他国に侵入されず、侵入しないこの國は、温暖な気候とあいまって、非常にのんびりとした国民性を有し、それはまた王家も同様な性質の人間で構成されていることを示している。

王家人間が思いつきで起す騒動は、人々の笑いや噂話の種となり、彼らは興味と尊敬と嘲笑を一手に引き受ける、道化、のよつな存在となりつつあった。

「！」のよつな娘はおらぬか！

突然現れた若い男を、一同は胡乱げに見つめた。
一瞬にして自分に視線が集まつたことに、男はたじろぎ、だが己の職務を思い出したのか、上ずつた声で口上を述べる。

「殿下のお召しである。隠し立てするとためにならぬぞ」

精一杯虚勢を張つたその姿に、館の主は失笑で答える。

「まあ、隠し立てするほどのもんじゃないけど」

王家からの使者といひのとて、一向にひるんだ様子のない年かさの女は、男から渡された文書を一瞥する。

確かに、そこには彼女が思い当たる人物について尋ねる文言がしたためられている。

それを渡された彼女よりも若い女は、さうに冷めた目で男を見上げる。

彼女たちは今、家族そろつての食事どきである。

久しぶりに揃つた一族での晩餐を邪魔された格好となる彼らは、使者に全く敬意を払うようすもない。いや、一部にはご馳走を目の前にしてあからさまに敵意を持つた視線を飛ばす人間もいるほどだ。

「偶然とはいへ一族が揃つているときこきたのは、神の思ひ召しなのかも」

全く神を信じていない女が、そう呟く。

「さつさと答えぬか

「それよりも、ここまで通しちゃつた警備の方がまずくない？お母様」

「それは、まあ、王家の紋章なんて、見たことがあるほうが少ないし。ともあれ処分は必要だな」

「どうせなら替えてしまえばよいのでは？役立たずは嫌いです」

「やつ言つた、あれにはあれの言い分がある」

自分の言葉が全く聞こえていないかのような態度を見せ付けられ、男はさらに声を張り上げる。

「答えぬかーええい、不敬罪で処分してくれるわ！」

その言葉に、よつやく最も年かさの、母と呼ばれた女が立ち上がり、男の側近くへと歩き出す。

「我が家を？四大陸にも我が家あり、と呼ばれるヴァイシィラ家の
人間を？」

商売人らしく笑みを浮かべ、だが妙に迫力のある態度で言い募る。
使者はたじろぎ、あとずたる。

「まあいい、使いの人間をいじめても仕方がない」

「ぐり、と何かを飲み込み、使者は女の言葉を待つ。

「お尋ねの人物だが」

無言を重ねる使者に、さらりと笑みを浮かべる。

「もうひとつ死んでいる」

だが、齎された衝撃的な言葉に、使者は思わず声をあらげる。

「ああ、つるさい。大声を出さなくとも聞こえている」

それを淡白にあしらい、彼女はなおも続ける。

「その髪色、顔かたち、おまけに名前。確かにそのものは我が家に
居た」

「だったら、嘘などつかず、さつさと差し出すがいい」

「死んだと、言つただろう」

「そんなはずはない。それは紫の魔女の予言だ」

「紫の魔女、ねえ」

紫の魔女とは、好んで紫色の外套を纏っていた魔術師の女であり、力が台頭してきたころより王家に仕えていた人間だ。彼女は魔術師というよりも、神がかった予言を得意としており、それにより、この国が幾度も恩恵を受けていることは、子供でも知る事実である。だが、晩年は老化とともにその予言も不確かなものが増え、時間軸がされた予言をしていたのは、ごく一部が知るところである。恐らく、使者がもたらしたその予言は、彼女の遺言ともいえるものだろう。魔女は死に、ご大層な葬儀が行われたばかりだ。

「謀つたところでおもしろくもないだろう。商人は信用第一。嘘は身を滅ぼすだけではすまない」

彼女の迫力に、使者は口を開けない。

「あのな、その手配された女は、確かにこの家にいた。いや、この家を作つた」「だつたら」「黒髪が美しい、サユリ、といつ女は」「そうだ、素直に出せばよい」「私の母親だよ」「は？」
「だから、サユリという女性は、私の母だし、彼女はもうとつくてこの世を去つた」「いや、だが」

信じようとしない使者に、ヴァイシイラ家の面々は次々と自己紹

介をしていく。

サコリの長女、長男、次女、長女の娘たつ、長男の息子と娘。そこまできて使者はようやく事態を把握した。

「サコリ嬢は、いない」

絶望とも思える顔をしながら、使者は急ぎ王宮へと帰つていった。取り残されたものたちはためこみをつけ、一族をまとめる長女の合図で団欒を再会した。

珍しき黒髪を有したサコリと二つ少女を娶れば、この国はまた一段と豊かなものになるだろ?。

紫の魔女が遺したその予言は、王へ伝えられ、急ぎ跡取りである王子の手配のもと、予言された場所へ使者が送られた。だが、晩年の魔女の予言は時間軸があやしかったことをどうしてだか知らなかつた王子は、まだ見ぬ花嫁へ夢を募らせていた。それが、ヴァイシイラ家が巻き込まれた騒動であり、この国に長きに渡つて伝えられる笑い話の始まりであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430z/>

遅れてきた王子

2011年12月1日19時46分発行